

「台風 19 号等による災害からの復興のための実践活動及び研究」成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

被災写真救済活動の立ち上げ時における即興的協働に関する実践研究

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名：宮前良平

②所属・職名：大阪大学大学院人間科学研究科・助教

③構成メンバー（ 他 0 ）人

氏名：

所属・職名：

氏名：

所属・職名：

氏名：

所属・職名：

(2) 実践活動・研究の成果

- ・4000 字程度で記してください。図表を入れる場合は、数点程度としてください。
- ・復興にどのような貢献をしたか（する可能性があるか）を明確に記述してください。
- ・成果に基づいて論文投稿や学会発表を行った場合は、そのリストを付してください。
- ・学会ホームページで公開しますので、著作権やプライバシーの保護にご留意ください。

【研究背景】

本実践研究の目的は、2019 年に発生した台風 19 号（令和元年東日本台風）の被災地である長野県長野市松代地区、および長沼地区での被災写真洗浄活動の立ち上げ時における組織の成立過程を明らかにすることである。

台風 19 号は 2019 年 10 月 12 日に静岡県伊豆半島に上陸し、その後関東地方から福島県へと縦断し、周辺自治体を含む極めて広い範囲に大きな影響をもたらした。その規模は近年の台風災害の中でも最も大きく、気象庁が発令する警報の中でも最も警戒レベルの高い大雨特別警報は 11 府県に発表され、その数は特別警報の運用開始以来最多であった。2020 年 10 月 13 日時点での死者数は 118 人、行方不明者数は 3 人、全壊 3,263 棟であった（消防庁、2020）。

本研究の調査対象地である長野県長野市は、全国的にも大きな被害を受けた地域である。特に市内北東部に位置し、須坂市や小布施町に隣接する長沼地区では、地区内を流

れる千曲川が決壊し、大きな被害が出た。それを受け長野市社会福祉協議会は、10月16日に災害ボランティアセンターを立ち上げ、週末のみの運営に移行した1月18日までで63,399名のボランティアを受け入れた。本研究は長野市内の北部に位置する長沼地区と南部に位置する松代地区を対象地として選定した。

災害後に行われるボランティア活動の中でも、被災写真救済は比較的新しいものである。水害が起きると家屋に所蔵されていた家族写真が流出する。日本においては、東日本大震災以降に「被災写真洗浄活動」が有名になり、現在でも多くのボランティアが活動を続けている（例えば、宮前・渥美（2017）や宮前・渥美（2018）など）。また、西日本豪雨以降、全国的に被災写真洗浄が行われるようになってきている。しかしながら、これらの研究は被災後数年が経過して後の復興と写真洗浄の関係について論じており、被災直後に被災写真洗浄活動が組織される際の動態については明らかにされていない。

したがって本研究では、被災直後の被災地において、被災写真洗浄活動が組織される動態を質的に明らかにしていく。その際に、Quarantelli(1994)による災害時の組織論的観点や、災害時における即興的協働（e.g., Wachtendorf & Kendra, 2012）といった理論を参照していく。

【研究方法】

本研究では、現地調査とキーパーソンへのインタビュー調査を行った。現地調査は、筆者が自ら災害直後から被災地である長野県長野市にボランティアとして入り、写真洗浄を行いたい市民の声を集めていった。現地調査は33日間に及んだ（2019年10月30日～11月4日、11月13日～17日、11月30日、12月1日、12月7日～9日、1月11日～15日、2月1日～4日、2月11日～13日、7月6日、10月19日～20日、11月9日～10日）。また、現地調査をする中でボランティアや被災者の方々の生の声を聞いてきたが、それに加えて、現地の写真店の店主の方や、長野市社会福祉協議会の職員の方、1年以上も続けて写真洗浄のボランティアをしている方などにインタビューを行った。また、遠方のボランティアとの連絡用として使用していたFacebookメッセージも活動内容を振り返るために用いている。なお、本研究を行うにあたっては、調査者が所属している大阪大学大学院人間科学研究科共生学系倫理委員会の承認を受けた（課題番号OUKS2001）。

【結果】

長野市内では主に2つの写真洗浄団体が組織された（詳しくは表1を参照）。一つは、長野市南部の被災地である松代地区で立ち上げられた「1 piece [松代]手のひらプロジェクト」である。もう一つは、長野市北部の被災地である長沼地区で立ち上げられた「長野写真洗浄プロジェクト」である。こちらは愛知県名古屋市を本拠地として活動する特定非営利活動法人アイキャンの手によって立ち上げられた。

写真洗浄の情報共有を行っていたFacebookグループで意見交換をする中で、11月4日に長野県内在住のボランティア2名と当時長野に滞在していた調査者が直接会って話し合うことになった。その際に、ボランティアの一人が住んでいた地域に近い松代地区の写真洗浄する団体を立ち上げることが決まった。松代地区での写真洗浄の特徴は、地元のボランティアが外部からのサポートを受けながら写真洗浄団体を組織し運営して

いた点にある。松代での写真洗浄活動を主導したボランティアの方は写真洗浄の経験は無かったが Facebook でのつながりから他地域で洗浄経験のあるボランティアの支援を受けることができた。その後、シニア大学の協力を得て、洗浄活動を継続させていくことになる。

次に、長野市北部の被災地である長沼地区では、11月上旬頃からボランティアが道に落ちていた被災写真や位牌などをボランティアセンターに持ち込むという事例が連続して起きた。それら写真や位牌をボランティアコーディネーターとして活動していた須磨さんがボラセン内で乾燥を始めたのが、長沼地区での写真洗浄の原型であった。その後、12月に長沼地区で災害救援の活動をしていた特定非営利活動法人アイキャンが地区内の写真洗浄を一手に引き受けることになった。アイキャンはもともと国際的な子どもの支援を専門に行う団体であり、写真洗浄のノウハウは持っていなかった。そのため、ボランティアに来た写真洗浄経験者が技術指導者としてノウハウを伝えていった。長沼地区の特徴は、ボランティアによる自然発生的な写真洗浄の萌芽をもとに、NPO 法人が、自らの仕事の幅を広げる形で写真洗浄を組織していった点にある。しかしながら、その活動を支えていたのは、写真洗浄を行う地元のボランティアの方々であった。なお、被災写真の枚数は、松代ではおよそ 1000 枚、長沼では持ち主がわかっている分だけで 3 万枚超であった。

表 1 長野市内での写真洗浄の動き

	長野市北部（長沼）での動き	長野市南部（松代）での動き	外部からのサポート
11/2			他府県の写真洗浄関連団体が中心となって長野県内の写真洗浄に関する Facebook グループを結成
11/4		写真洗浄団体立ち上げに向けた打ち合わせ	
11月上旬ごろ	災害ボランティアセンターりんごの里サテライトにボランティアから写真や位牌などが届けられるようになる		
11/15ごろ	ボランティアのコーディネーターをしていた須磨さんがボラセンのテント内で写真を干し始める		
11月下旬	県社協が中心となって県内の団体を基に写真洗浄ネットワークを構築する案が出る		
11/30		市民ボランティアの方が中心となって「1piece[松代]手のひらプロジェクト」（松代での写真洗浄団体）立ち上げ	
12/6	長沼地区で活動していた特定非営利活動法人アイキャンが地区内の写真洗浄を引き受けることになる		
12/9		松代写真洗浄講習会@東寺尾公民館	あらいぐま岡山から福井圭一さん、被災写真救済ネットワークから秋山真理さんを講師としてお招きし、大阪からのボランティ

			アの方にも洗浄経験者としてお手伝いしていただいた
12/20		写真洗浄会@松代公民館	松代での洗浄活動はこれ以降主に「1piece[松代]手のひらプロジェクト」とシニア大学のメンバーによって行われていく。
1月	週に数回の写真洗浄会を始める		ボランティアの須磨さんや大阪府立大ボランティアセンターの学生、岡山で写真洗浄を行っている福井さん、片岡さん、大阪洗浄の田中さんが技術指導に入る
1/14		写真洗浄会@松代公民館	
1/28		写真洗浄会@松代公民館	
新型コロナウイルスの感染拡大に伴って中断			
7/6		写真洗浄の再開に向けた打ち合わせ	
9月以降		信州ベースが写真洗浄の一部を受け入れ	
10/12		写真洗浄会@松代公民館	
10/19		写真洗浄会@松代公民館	
11/9		写真洗浄会@松代公民館	
11月下旬		お預かりしていたすべての写真の洗浄が完了し解散	

その他の写真洗浄の動きとして、ボランティアが自発的に泥出しに入った家庭で写真洗浄を行っていた事例や、被災された方が自力で洗浄していた事例、そして、写真館に泥で汚れた写真が持ち込まれた事例がある。特に、長野市の隣の須坂市にある勝山写真館では、被災写真の受け入れを無償で行っており、上述の2つの写真洗浄団体のアドバイザー的な役割も果たしていた。

【考察】

以上の長野市内での写真洗浄の動きをDRC分類(Quarantelli, 1994)をもとに整理してみたい。DRC分類とは、災害時の組織の変容を4種類に類型化したものである(表2)。

表2 DRC分類(Quarantelli, 1994)

組織構造			
仕事内容	平時のまま	平時のまま	災害後に増加
	通常型	(Established)	拡大型 (Expanding)
	新しく発生	拡張型 (Extending)	創発型 (Emergent)

松代の事例は、ボランティアが一から写真洗浄を立ち上げた。上記分類で言うところの「創発型」と言える。しかしながらここで重要なのは、組織が創発されたのではなく、すでにある写真洗浄団体との関係が創発されたという点である。全くの一から松代で写真洗浄が始まったのではなく、外部からの様々な支援があつてこそ洗浄活動が成立した。これは、外部支援団体(例えば真備洗浄)の視点から見れば、「新たに長野でも写真洗浄が始まった」という形になり、写真洗浄の連携団体が増えたという意味で上記分類の「拡大型」に属するだろう。

次に、長沼の事例を考えてみよう。NPO法人が長野で新たに写真洗浄という仕事を始

めたというふうに見れば「拡張型」である。しかしながら、洗浄を実働的に支えていたのは、「創発型」とでも言うべき地元のボランティアの方々であった。

以上をまとめれば、写真洗浄という新たに生じたボランティア活動においては、少なくとも以下の二通りのパターンがあると仮定される。①組織的には「創発型」だが、新たなネットワークが生じたという意味では「拡大型」というパターン②組織的には「拡張型」だが個々人のボランティアとのネットワークは「創発型」というパターン。もちろん、これ以外にも多くのパターンは想定されるが、本調査の結論として以下の仮説を提示しておきたい。つまり、災害後のボランティアの組織化を分析するにあたって、①組織間ネットワークのレベル②当該組織そのもののレベル③個々人のボランティアのレベルの3つのレベルがある。これらのレベル内でのダイナミズムやレベル間の相互作用を今後細かく調査していく必要があるだろう。

最後に、写真洗浄という活動に特有の問題を指摘したい。そのことによって、上記の3つのレベルの差異が明らかになるように思われる。それは、洗浄すべき写真は、あくまでも「被災された方々から一時的に預かっているに過ぎない」ということである。つまり、被災者から写真洗浄団体に持ち込まれた写真は、その団体にしか扱うことができない、言い換えれば、洗浄ができなくなったからと言って他の団体に明け渡すことができないのである。もっと踏み込んで言えば、持ち込まれた写真は、被災された方がその団体のことを信用して持ち込んだのであるから、組織間のネットワークを介して他の団体に洗浄を再依頼することは難しい。さらに写真に写っているのが極めて個人的なことであり、プライバシー保護の問題もあるため、十分な信頼関係が構築されていないうちに他団体に被災写真をおいそれと渡すことはできない。ここに①のネットワークのレベルでできること（例えば技術指導や組織の立ち上げの助言）と②の組織そのもののレベルでできること（写真を受け取り保管すること）そして③ボランティアのレベル（写真を洗浄すること）の差異が現れる。これらのレベル間の差異についてのダイナミズムやそれらが実際にどのように復興に寄与し、あるいは復興の妨げになっているのかについてはさらなる調査で明らかにしたい。

【参考文献】

- 宮前良平・渥美公秀（2017）被災写真返却活動における第2の喪失についての実践研究. 実験社会心理学研究, 56(2), 122–136.
- 宮前良平・渥美公秀（2018）被災写真による「語りえないこと」の回復. 実験社会心理学研究, 58(1), 29–44.
- Quarantelli, E. L. (1994). Emergent behaviors and groups in the crisis time periods of disasters. *DRC Preliminary Papers*, 226, 1–40.
- 消防庁（2020）令和元年台風第19号及び前線による大雨による被害及び消防機関等の対応状況（第67報）<https://www.fdma.go.jp/disaster/info/items/taihuu19gou67.pdf>
- Wachtendorf, T., & Kendra, J. M. (2012). Reproductive Improvisation and the Virtues of Sameness: The Art of Reestablishing New York City's Emergency Operations Center. *International journal of mass emergencies and disasters*, 30(3), 249–274.

「台風19号等による災害からの復興のための実践活動及び研究」会計報告書

活動・研究名称	被災写真救済活動の立ち上げ時における即興的協働に関する実践研究	
代表者 氏名・所属	宮前良平	大阪大学大学院人間科学研究科

1. 助成額	¥240,000
--------	----------

2. 支出合計	
(1) 機器・備品	
1)	
2)	
3)	
(2) 消耗品	
1) 書籍5冊	¥7,722
2) ScanSnp、フィルムスキャナー、カードリーダー	¥73,018
3) SDカード	¥4,072
(3) 旅費・交通費	
1) 宮前良平（大阪-長野）7/3-7 4泊5日	¥73,679
2) 宮前良平（大阪-長野）10/18-20 2泊3日	¥57,509
3)	
(4) 謝金	
1)	
2)	
3)	
(5) その他	
1) 一般管理費	¥24,000
2)	
3)	

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。